

今回、埼玉県とドイツのブランデンブルグ州との友好親善の架け橋として、ドイツに派遣していただいて、とても貴重な経験を多く積むことが出来た。始まりは、友人の誘いであった。過去にヨーロッパを訪れたこともなく、突然のことだったが、主にサッカーなどでドイツには興味があったため、すぐに賛成した。まもなく訪れることが決まって、心はずっと浮き立っていた。そして実際に、今回のプロジェクトに参加して感じた、または学んだ多くのことから具体的に3つ綴っていこうと思う。

最初に、国際交流の魅力である。現在までの僕の人生で、今回のような多国籍なコミュニティに身を置くことがなかったため、最初はとても戸惑ったが、海外特有の人懐っこく、気さくな笑顔に緊張がほぐれ存分に国際交流を楽しむことが出来た。国際交流を図ることで、海外から見た時の日本を強く感じる事が出来た。例えば国民性だ。すでに話に挙げたように海外の人は、本当に人懐っこくて、仲良くなろうと積極的に話しかけようとしてくれる。一人でいても関係なく他の国籍の人とすぐ交流している様子を見て、心からすごいものだと感じた。比べて、多くの日本人は外国の人と接する際、受動的であるし、集団で動くということ多いのではないかと思う。こういった日本人の少しネガティブな要素も感じていたが、反対に、だからこそ評価される日本人の強みもあると感じた。それは、日本人の真面目さである。例えば日本チームは、ストリートサッカー大会の開会式や、他のイベントの集合時間に10分前にはついてしたが、その際、他国のチームは全くおらず、遅れてくるチームさえいた。こういった日本人の時間に厳しいところや、約束を守るといった日本では当然のことが、海外では尊敬に値することなのだと感じた。このようなことを感じる事が出来たのも、数日間国際交流を楽しむことができたからだと思う。

次にドイツの建物や景観のすばらしさである。それぞれの街に個性のようなものを感じた。特に今回訪れたブランデンブルグ州やその周辺には、見るべき建物などがたくさんあった。まず初めに、定番のベルリンの壁である。ベルリンの壁はドイツ分断と東西冷戦の象徴であったものだ。率直に見た感想から言うととても感動的であった。壁はドイツの歴史を物語り、なにか強いメッセージのようなものを感じた。具体的には、壁に多く描かれた宗教的な絵や平和を望む人々の願い。そこには言葉や思想の壁を越えた様々な表現が記されていた。中には差別ともとれるような過激な表現や、攻撃的な主張があった。これら多くのことから、ドイツが統一された現在でも、国民すべてが同じ方向を向くことの難しさがうかがえる。同時に、その規模が世界規模になるのであればなおさら難しいことであろうと思った。次にサンスーシー宮殿である。この宮殿は主に18世紀にフランスから流行したヨーロッパの建築様式を用いて造られたものである。実際に訪れてみると、本当に庭が広大で、散策するのにとても心地のいい場所であった。宮殿自体は私が訪れる前に抱いていた華やかさ、壮麗さ、といったイメージとは少し異なり、和やかさを感じさせるものであった。後日自分で調べてみると、ロココ様式が目指していたものは、バロック様式のような劇的なものではなく、身近な人々を心温め親しみが持てるように造られたものとあったので、納得した。このような、時代に合わせたものが造られる当時の建築者の流行に関する敏感さに非常に感銘

を受けた。

最後に仲間への感謝である。引率や、数々の手続きなどして下さった埼玉県庁の多くの方への感謝の気持ちはもちろんのことだが、今回のブランデンブルグ州訪問、ストリートサッカーチャンピオンシップへの参加にあたっては、特に仲間に助けられた。自分の身の回りのことで精一杯で、とてもマイペースな私はドイツでの10日間本当に仲間に世話をかけたと思う。まず、英語が得意でない私を気遣って、言わずとも通訳してくれたり、分かりやすく説明をしてくれたりした。他にも、私の苦手なことや私のミスを全力でカバーしてくれた。プロラの部屋でシャワー浴びている最中、水が漏れて気づかずに部屋中をびしょびしょにしてしまったあの苦い思い出も、全員が処理に手伝ってくれたりと本当に助けられた。仲間へのいちばんの感謝を感じたのは、なんといってもストリートサッカーチャンピオンシップのことである。結果は伴わなくて本当に悔しかったが、誰かがつらいときや、ミスしたときはカバーしあった。そういう意味では本当に素晴らしいチームであったと思うし、このメンバーでこれたことを幸せに思う。砂浜で遊んだり、ストリートサッカーチャンピオンシップ中の交流イベントも、仲間がいたから存分に楽しむことが出来た。

これらまとめた3つのことは、日本で過ごす日々の10日間では絶対に経験することのできない出来事であったと思う。そして、このプロジェクトに参加することで普段味わうことのできない充実感を得ることが出来た。今回のブランデンブルグ州訪問に携わって下さった皆様と、大切な仲間の存在に本当に感謝したい。

徳岡孝二